



滋賀県や甲賀市に関連する資料が並び

土山地域市民センターで8月4日から19日にかけて平和を願うパネル展を開催し、多くの方にご覧いただきました。

期間中、滋賀県の被害状況や戦争と人々の関りをはじめ、信楽で陶器製の地雷や手榴弾の兵器が作られていたことなど、滋賀県や甲賀市に関連のある戦争の資料が数多く展示されました。また、海軍の衛生兵だった山中さんをはじめ、市内の方の体験談も紹介されました。

地域の歴史という点からも、市民の皆さん一人ひとりが戦争の悲惨さと平和の尊さを感じ、平和の大切さをかみしめる機会になりました。

地域の歴史を学ぶ 平和を願うパネル展

人間誰でも殺し合いはしたくない

—セレベス島での戦場体験—

山中さんは、昭和16(1941)年、中学を卒業後、18歳の時に海軍を志願し、衛生兵として3年間舞鶴海軍病院で勤務され、昭和19年4月には、急遽新編成された第119防空隊の一員として赤道にあるセレベス島(現在のインドネシア・スラウェシ島)のメナド海軍病院に配置され、負傷者の手当てなどに従事されました。



やまなかみ お
山中文夫さん(水口町)
現在でも親交のある戦友と揃いの「海軍大将」の帽子をかぶって

戦場では、病院も関係なく攻撃を受けるような状況下で、たまたま不発弾だったため助かったのですが、1トン爆弾が間近に投下されたこともあり、空襲ごとに一度に40～50人もの負傷者が運び込まれては、無我夢中で手当てをされたそうです。

終戦直前、一層攻撃が激しくなる中、応戦する銃弾もなく、連合軍の上陸に備えて「重箱作戦」が計画されました。手榴弾2つと移植ごてが入った重箱大の箱を渡され、戦車を通る道路に掘った穴に入り、一つは向かって来る戦車に投げつけ、もう一つは通過する時、頭の上で箱に入れて爆発させよという命令だったそうです。

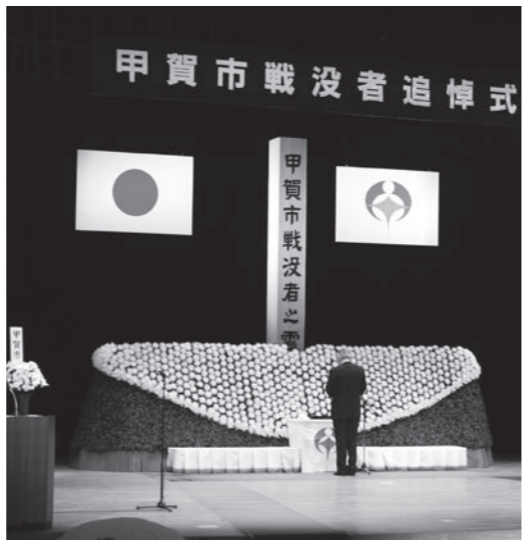
「死ぬのが怖いもなにも、しょうがないわ。」「人間誰でも殺し合いはしたくないもんや。」と、当時を思い出しながらそうくり返されました。

結局、手榴弾を使うことはないまま終戦を迎え、連合軍の捕虜となった後、昭和21年6月に日本に帰国されました。

市戦没者追悼式

戦争で祖国や守るべき家族のために命を落とされた方々に哀悼の意を捧げるとともに、恒久平和を誓う市戦没者追悼式が8月28日、あいこうか市民ホールで開催されました。

式典では、中嶋市長が慰霊の言葉を述べ、続いて参列者が追悼の思いと平和への祈りを込めて静かに献花を行いました。また、広島平和記念事業に参加した小学生7名と次世代戦跡訪問事業に参加した中学・高校生2名による作文朗読が行われ、感想などを発表しました。



慰霊の言葉を述べる中嶋市長

六日、広島に原子爆弾が落とされた時を経験された、被爆者の一人なのです。吉岡さんは、当時中学二年生の十六才でした。中学生なのに勉強できず、国のために働いていたそうです。今の私達には、考えられない事だと思えます。

平和について考えたこと

私は初めて広島に行きました。一番に残っているのが資料館にある模型でした。広島に落とされた原爆による放射線をあびて人々が苦しんでいるものでした。子供から大人までたくさんの人々が水を求めて歩きまわっていました。「たすけて、たすけて」とさげんでいそうな悲しい顔がたくさんありました。また、服がぼろぼろにやぶれていたたり、少しけた三輪車が展示してありました。この三輪車に、「二才の子が乗っていたか」と思うとおそろしさで頭がいっぱいになりました。

平和への 誓いを新たに

戦後66年が経過しました。現在、私たちが享受している平和と繁栄は、計り知れないほどの大きな尊い犠牲の上に成り立っていることを忘れてはなりません。

市では毎年、市民の皆さんとともに、市戦没者追悼式をはじめとした、過去をふり振り返り恒久平和への誓いを新たにしている取り組みを行っています。



広島平和記念式典に市内小学生23名が参加

広島平和記念式典へ参加するため、8月5日・6日の両日、市内小学校の6年生の代表が現地を訪れました。市では、次代を担う若い人たちに、平和の尊さを学んでもらうため、毎年同式典への参加を実施しています。今年も、23名の児童が参加、5日に、市内全小学校とデイサービスセンター「すこやか荘」から託された千羽鶴を原爆の子の像に捧げました。6日には、平和記念式典に出席、原爆犠牲者の冥福を祈るとともに、核兵器の廃絶を願い、平和への誓いを胸に刻みました。ここでは、参加した児童の感想文(抜粋)をご紹介します。

戦争や平和について 考えたこと

私たち一人ひとり、だれもが大切な存在です。それなのに、どうして人間は、たくさん命を犠牲にしてまで争いをするのでしょうか。戦争で失う物は多いですが、得る物など、何もありません。

平和は見つけるのではなく、自分で作り出すものだと思います。人は、一人では生きていけないと思います。周りの人と支え合い、協力して、生きていくものだと思います。これからの未来に向けて、夢と希望を持って、二度と恐ろしくて悲しい、戦争が起らないことを願います。

原爆の子の像を通して

原爆の子の像のモデルは佐々木

木禎子さんという女の子だそうです。禎子さんは二歳で被爆し、十年もたつてから白血病で短い一生を終えた少女です。禎子さんが白血病で入院しているとき、鶴を千羽折ったら願いがかなうという、言い伝えを聞きました。

禎子さんは一生けん命自分で鶴を折ったそうです。病気に負けたくなかったんだと思います。年齢が自分ととても近いのでかわいいです。禎子さんもかわかったのだと思います。千羽鶴をささげる理由は禎子さんが今、この世の中にいなくてもどこかで病気を治すためだと私は思いました。原爆の子の像は禎子さんのお墓みたいなものなのでしょう。

平和記念資料館で見た 広島悲劇

広島平和記念資料館には当時の写真や亡くなられた方々の遺

品が数多く展示されておりました。資料館の中を歩いていくと茶色の泥のかたまりのような物が見えてきました。近づいて見ると、なんとそれは小さなガラスビンが並んだかたまりでした。

僕は、原子爆弾の熱が大量のガラスビンを溶かすほど熱いのかと驚きました。広島の人々はどんなに熱かったことだろうか。原子爆弾のたった一つの爆弾で広島市がなくなってしまうなんて同じ人間がしたとは思えません。ただ溶けたたたくさんの遺品を見て、これが実際に起こったことだと気がきました。

語り部の方のお話を聞いて

私が二日間の中で一番印象に残ったのは、語り部の吉岡幸雄さんのお話です。

吉岡さんは、一九四五年八月